の屈曲があった方が面白いこともある。

これらの道路が整備される他に、さらに九州縦貫高速道が貫通すれば、これらのルートはさらに短時間で結ばれることになろう。快適な道路さえ通れば、熊本県には今まで知られなかった眠れる宝が随所にころがっていることがわかるだろう。だから熊本観光の出発点は道路にあるといっても過言ではない。しかも道路は産業開発の出発点でもある。

芸術作品としての構築物……■

これらの道路はいずれも、その形が自然の地形と調和し、山を切りとった傾斜面も従来のような殺風景なものとしないで、近代の抽象彫刻のような形と肌にすることも面白いだろう。ガードレールその他のいわゆるロード・ファーニチュアのデザインにも細心の注意を払いたい。橋の形も色も、海にかかるものは海にふさわしく、溪谷をまたぐものは、溪谷に自然との調和について世人も大いに批判し注文をつけるべきである。道や橋やトンネルは工学による構築物だから、自然美の中におかれても人工美となる必要がないのだという狭量な思想が、まだ一部の技術者の中に残っているからである。

同じことは観光地に建つホテルなどの建築物についてもいえる。建築は工学による構築物ではあるが同時に芸術でもあらねばならぬ、ということはどの建築家もよく知っている。しかし残念なことに、それは非常にむずかしいので、時には芸術性が乏しかったり、自然に調和しなかったり、時には逆に、芸術性は高いのに恐しく不経済であったりすることがある。熊本県の観光地にはそのように失敗した建築物の実例は多い。しかし早くから開けた観光地にくらべるとまだ少ない。だから今後建つ建築は自然によく調和して、しかも便利かつ堅牢で経済的なものにしなければならぬ。これに成功するなら、熊本の観光施設はおそらく日本

大自然と人工の美しさと

さわしいものにしなければならぬ。トンネルの入口も山の肌に調和し、中の照明燈にも心を配りたい。

道路や橋やトンネルは、国や県や公団の専門家が造るものだから、だまって御まかせするという態度はいけないと思う。特に観光を主目的とするものならば、一のものとなろう。

そのためには、ただ単に一級建築士が設計すればいいというのではいけない。日本の建築士は欧米にくらべるとその数はすごく多いが、残念ながらその質はかなり劣っている。特に芸術的感覚と技倆においてそうである。従って熊本県の観光施設を設計する建築家は特に厳選されねばならぬ。それだけではない。自然の風景の中に建つ建築は、谷から見上げるとどんな形に見えるか、山から見下ろすとどんな形に見えるか、木立からすかし見るとどんな色に見えるか、霧がかかったらどうか、雪におおわれたらどうかというような、現地の地形、気象、樹木などとの関連について細心の配慮をもって設計しなければならぬのである。そのためには建築家は現地をすみからすみまで知りつくしていなければならぬ。東京や大阪の建築家の中には感覚と技倆がすぐれた人もいる。しかし現地をくわしく知らぬ。だからこのような建築家に依頼するときは現地をくわしく知ってもらってからにしなければならぬ。

観光開発はまず道路……写真は内大臣橋

これほど豊富な温泉に恵まれながら、道路ゆえに行きどまり観光、往復観光の不利を招いていたのだ。

湯の谷の県営有料道路の完工や、下田—地獄—赤水を結ぶ路線の整備、あるいは国鉄日の影線の連絡開通、外輪山スカイラインなどに、期待がかけられている。立野から、名物七曲りをひとまたぎして、戸下に至る大陸橋も、構想の段階から調査の段階に入った。

ともあれ、長陽を訪れる観光客は、年間二十五万人、除々ではあるが着実に伸びをみせている。道路整備とならんで、風光、観光資源の開発、収容力の増大など、観光の専門的な検討を重ねて行く必要もあるのだ。

〝仙酔峡〟と〝北外輪〟

△阿蘇郡一の宮町▽

一の宮町の場合も、横断道路に大きな期待を寄せる一方に、通過観光への懸念もあるわけだ。一の宮町観光の主力は、仙酔峡と北外輪の開発であろう。

まず、仙酔峡に至る有料道路と、阿蘇山への新ルート、ロープウェイが開通した。さらに懸案の温泉試掘も始められている。また、新しい魅力を秘めた北外輪であるが、阿蘇七鼻のなかでも、阿蘇町の遠見ヶ鼻(大観峯)、一の宮町の象ヶ鼻、古城ヶ鼻(城山)などの景観は特にすば

北九州

土地柄を生かした観光に

観光窓口の

北九州から熊本県を訪れる観光客は近頃特に増えてきている。

この増加の原因としては、列車の延長、準急列車の増発、観光バスによる遠距離回遊など足の至便化が図られたこと、過去三回北九州市で開催した観光展をはじめ、県下各観光地の絶えまない宣伝啓蒙により「観光くまもと」が当地域住民に広く紹介され親しみ深くなったこと、県内道路の改修、観光施設の整備も進み受け入れ態勢の充実化が図られて来たことなどが考えられる。

観光旅行者の最近の傾向は四季を通じての動きが目立っている。シーズンを殊更さけて閑静な時期を選んだり、また余り俗化していない自然も求められている。

現在旅行あつ旋業者の旅行計画、案内をみると、横断道路開通後における観光道路周辺への送客が殆んどである。

横断道路の完成、その他県内各観光地諸施設の拡充によって、今後当地からの観光客は増加の一途を辿ることは

全体の調和の中で……■

温泉旅館は、湯が出るところ、湯が引けるところならどこでも、あたりかまわず建てられた所が多いようであるが、湯の町全体の調和をこわさないようにしなければならぬ。たとえば、学校や社寺の近くには温泉宿は建てないようにしたい。また宿の窓から美しい景色が眺められたのに、窓の前に別の旅館が建ったために眺めをふさがれたとかいうようなことは止めたい。先に建てた宿だけを保護するというのではなくて、温泉町全体がてんでばらばらに建てるのではなく、お互の秩序と調和を保つように初めから計画を立てて建てようというのである。国立公園に指定されたほどの美しい景勝地には、たとえ温泉が出ても無秩序に建てないように、山あいに引っ込んだり、谷に降りたりして、目立たぬように建ててもらいたい。旅館そのものの設計も、客が部屋から見るせっかくの眺めをさえぎるようにしたり、向いの部屋からのぞかれるようなプライバシーがない例が多い。同じ金をかけて客を喜ばせる方法をむざむざと取り逃がしているのである。これも設計者の選択を誤ったためである。

改善できる旅館・土産品……■

またこのごろの観光地旅館の宿泊料はなぜあんなに高いのだろう。これを安くする一つの方法はサービス手間を省くことである。食事を各部屋に運ばないで中央食堂制に改めるのがよい。部屋に運ぶなら、廊下の長さを縮め、廊下の階段をなくし、ワゴンやリフトのような機械設らしい。北外輪五千町歩の原野開発は、観光牧場の構想などもはらんで、観光、産業の両面の振興を果たすであろう。

幾多の歴史と伝説を秘めた阿蘇神社、清洌な水で知られる国造(くにのみやつこ)神社など、観光の〝点〟にもこと欠かない。横断道路に流入する観光客は、年間百万人と予想される。その三十%の足をひきとめようと、意気込む一の宮町である。

〝点〟から〝観光拠点〟へ

△阿蘇郡阿蘇町▽

天の与えた宝物〝阿蘇山〟そしてその宝の山の奥殿〝噴火口〟を預る阿蘇町、何はともあれ阿蘇の観光に関しては、イニシアを取ってきた阿蘇町である。その阿蘇町も今や単に火口周辺にだけこだわってはいらなくなってきている。スケールの大きな観光を目指さなければならないのである。いわく、従来の〝点〟としての観光地から、阿蘇観光の一大拠点としたい、と。

たしかに、別府、熊本三時間という横断道路によって、噴火口の魅力だけでは、通過しようとする観光客を引きとめにくいかも知れない。そのためには、阿蘇全域に強力なチャームポイントを開発する必要があるわけだ。むしろ、阿蘇の真価は、火口よりも外輪山の雄大な高原美にあるといわれる。そして、拠点化の